

# 学生ボランティア、ISR-ConnAction：支援から協働への学びのプロセス

研究員：小早川 裕子(国際教育センター 准教授)

## 1. はじめに

2013年に結成されたISR-ConnAction (ISR)<sup>1</sup>は、主にフィリピンを支援する学生ボランティア・サークルである。2018年度現在、1年生から4年生の20人によって構成される小規模な団体である。筆者は、結成当時からISRの顧問を務めている。メンバーの流動性が高い大学のサークルを継続することは容易ではない。また、海外に活動拠点を持つ本サークルでは、多くの高度な能力が求められる。英語力、コミュニケーション能力、異文化理解能力、リーダーシップ、組織力、そして、実行力など総合能力の実践である。ISRは決して優秀な学生ばかりが集まるサークルではない。むしろその逆である。現実、ISRに入会するメンバーは、英語が不得意で自分に自信を持ってない学生が目立つ。そのようなISRが、毎年、国連ユースボランティア (UNYV)<sup>2</sup>、トビタテ留学<sup>3</sup>、KAKEHASHI プロジェクト<sup>4</sup>、日本語パートナーズ<sup>5</sup>など未知の世界で切磋琢磨するチャレンジャーを輩出している。本稿では、ISRが活動を通し、メンバーが考え、体験し、学ぶプロセスを紹介し、何が彼らを成長させていくのかを考察する。

## 2. ISR-ConnAction 結成の背景とその目的

2013年11月にフィリピンを襲ったスーパー台風ヨランダが去った後の悍ましい光景が、当時、連日のように各種メディアに映し出された(死者数6201人：フィリピン国家災害リスク削減管理委員会、2014年)。人間の想像を超える自然の破壊力は世界中の人々に衝撃を与え、多くを支援活動へと突き動かした。その動きは、東洋大学の学生たちをも立ち上がらせた。義援金を集める目的でISRが結成され、2013年12月6日にチャリティー・イベントが本学のスカイホールで開催された(東洋大学ウェブ)。チャリティー・イベントは参加者233人を数え、学生、教職員の他、外部からNPOなど協力団体も参加した。そのチャリティー・イベントは、NHKの朝のニュース番組でも取り上げられた。義援金は、ほぼ100万円になった(小早川裕子、2016)。

ISRが結成当時に掲げた目的は3つある。第1に、義援金を集めること。第2に、ISRがレイテ島へ行き、支援地域を直接探りだすこと。そして、第3に、活動は支援地域の平常生活の回復を見込み、3年間は続けるということだった。ISRの活動を広く告知する目的でFacebook公式サイ

<sup>1</sup> 結成当初は、「Oriental Sky Project (OSP)」を名乗っていたが、活動内容の変化に伴い2015年にISR-ConnActionと改名。

<sup>2</sup> UNYV 派遣：① 2016年(派遣先ウガンダ)(<https://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/112468.html>)

② 2017年(派遣先バングラデシュ：テロ発生のため中止)

<sup>3</sup> トビタテ留学：① 2015年(ラオス)(<https://www.toyo.ac.jp/site/gakuhou/92641.html>)

② 2016年(フィリピン)(<http://www.toyo.ac.jp/international-exchange/ies/program/318746/>)

③ 2017年(アメリカ・フィリピン)

④ 2018年(フィリピン・ウガンダ)(諸事情により、ウガンダ留学を断念)

<sup>4</sup> KAKEHASHI プロジェクト、2014年(<https://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/59182.html>)

<sup>5</sup> 日本語パートナーズ：① 2015年(タイ)(<https://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/101643.html>)

② 2018年(インドネシア)

トを開設すると、2013 年の最高アクセス数は 6 千を超えた。3 つの目的は、すべて達成している。

当時の学生たちは、共通の目的のために学部学年を超え、一丸となって目的達成のために奔走した。社会経験も知識もまだ浅い学生たちは、教職員や協力してくれた NPO メンバーからアドバイスを受け、組織づくり、イベントの運営方法、企業の協賛・支援の取得、事後報告の責任などについて多くを学び、行動した。どの学生の目も輝いており、限られた時間の中で集会を開き情報交換をし、互いを鼓舞する様子は、近くで見ていた大学の教職員に感動を与えた。

### 3. 支援先発掘活動期から託児所建設期（2013 年—2014 年）

ISR メンバー 12 名は、2014 年 2 月にレイテ島に向かい、支援先の発掘調査をした。メンバーは、被害が最も多かったタクロバン市を訪れたが、そこには既に世界各国から大きな支援団体が復興・復興活動をしており、小さな学生団体が入っていける隙間はなかった。最終的に、筆者が以前からセブのパートナーとして交流のある NGO GawadKalinga (GK)<sup>6</sup> のセブ代表に紹介してもらった、レイテ島ヒロンゴス地域のプノン村を支援することになった。GK レイテはプノン村に 14 棟の住宅供給をしている。当村は、世帯数 60 に満たない小さな漁村である。

プノン村を襲った台風は、ヨランダではなく、そのすぐ後の 2014 年 1 月に発生した台風バシチャンである。台風ヨランダのインパクトがあまりにも大きかったため、台風バシチャンは報道されることはなく、また、あまりにも小さなプノン村を知る者はいなかった。台風バシチャンは真夜中、村を襲った。外洋につながる川が村を囲むように流れている（図 1）が、大波が川伝いに村に流れ込み、漁船を洗い流し、多くの住宅を破損させた。暗闇の中、大人の胸元まで水が浸水したという。GK レイテが建てたブロックとセメントで建てられた住宅は、台風で崩壊することはなかった。被害を受けたのは、竹とバナナの木と葉で作られた家である（写真 2）。プノン村を訪れた ISR が、村の状況を把握すると、そこに託児所を建てて支援をすることを決定した。頑丈な託児所を建てる事で子供たちの教育施設を提供し、台風時には避難場所として利用してもらえ考えた。GK レイテの協力を得て、プノン村の住民との話がまとまると託児所建設の準備が始まった。その時以来、ISR は春と夏の長期休暇期間の年 2 回現地を訪れている。

ISR にとって 2014 年は、託児所の建設を通じた村民とのラポール形成期であった。学生たちは初め、村の近くにあるリゾート施設に滞在しながら村に通った。そして、一度、託児所に屋根

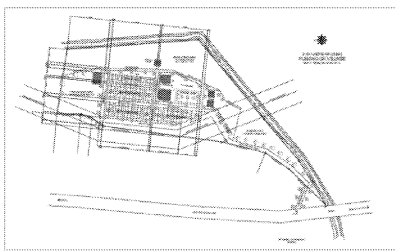


図 1 プノン村開発予定図（2014 年）



写真 1 魚を釣る村民と漁船

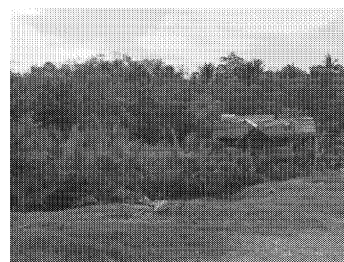


写真 2 プノン村の破損した集会場

<sup>6</sup> GK は貧困地域をコミュニティ開発と住宅建設で支援する NGO である。フィリピン全土で活動を展開している他、海外に広く支援ネットワークを持っている。(http://www.gk1world.com/home)

とトイレが設置されると、彼らはそこで寝泊まりして託児所の完成に励んだ。いつまた大きな台風が村を襲うかわからない。学生たちには、2 度と村民に同じ恐ろしい思いをしてもらいたくないという気持ちと、多くの人々の応援があつて ISR の活動が実現したこと、また、託児所の完成を心待ちにしている村の子供たちと触れ合う中で、責任とプライドが育っていった。フェイスブック公式サイトでは、ISR の活動内容を紹介していたが、直接的に活動を伝える必要があるのではないかとの考えから、学内の報告会を始めた。この報告会には、ボランティア活動に関心がある学生と教員、そして、ISR の先輩達が参加している。メンバーに二部生が増えたため、2018 年からは、昼休みと夕方の 2 回報告会を設けるようになった。

#### 4. 平常生活から見てきた村の現実と ISR に向けられた課題 (2015 年—2016 年)

2015 年までには、村の生活は従来通りに戻った。一方で託児所は、建物自体は完成したが（写真 5）、中身は空っぽで、机、椅子、ホワイトボード、本、本箱、下駄箱、ゴミ箱などを揃える必要があつた（写真 3、4）。ISR がチャリティー・イベントで集めた義援金は、すべて託児所建設で使い果たした。そのため、ISR の課題は、いかにして必要な備品を用意するかであった。チャリティー・イベントは、その後、2 回行ったが、時間の経過と共に人々のスーパー台風ヨランダの記憶は希薄になり、関心も失せていった（小早川裕子、2016）。ISR メンバーは、その状況に落胆しつつも現実として受け止めた。定例会議で行き着いた考えは、託児所に設備を揃える費用には大金は必要ではなく、少額でも持続的に資金を生み出す事であった。そこで、ISR は大学祭に出店し、以前から交流があつたバングラデシュの女性支援団体、「サクラモヒラ<sup>7</sup>」が生産販売する小物を売ることにした。サクラモヒラも、モノが売れ、知名度が高まると喜んだ（研究所日より、No. 51）。ISR は、学祭でボディーペイントでも収入を得ると同時に、古着を集め、それをセブ市のフリーマーケット（現地では、「ウカイウカイ」と呼ばれる）で販売し、小銭を稼いだ。ISR は、これらの活動から得た収入で備品を揃え、また、ソーラーパネルを屋根に設置して、夜でも託児所を使えるようにした（写真 6）。本箱や下駄箱は経費節減のため、村の大工さんの指導を受けながら、メンバーが板から作った。

日中夜利用可能となった託児所に滞在しながら、ISR は、その使い勝手を確認した。そこでメンバーは、二つの課題に気づいた。一つは、水である。村では井戸水を生活水として利用している。しかし、4、5 人の ISR メンバーが村に滞在するだけで、一気に水は底をついてしまう。もう一つの課題は、託児所の先生の雇用である。月 3,000 ペソ（約 7,000 円、2017 年現在）もあれば良いとのことであつたが、村にも村民にも貯蓄がない。村民との話し合いの中から、託児所の先生が不在のため、ISR が日本にいる間は、村長が鍵を保管し利用されていない事がわかった。これでは、本末転倒であり、早急に解決法を考える必要があつた。

ここでプロン村の生活について触れておきたい。プロン村の漁船はエンジンもない小舟（写真

---

<sup>7</sup> サクラモヒラ：<http://www.sakuramohila.com/>

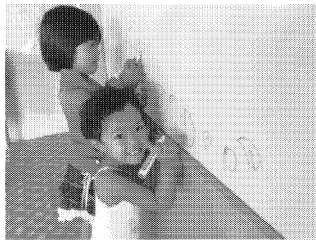


写真3 託児所内の子供達

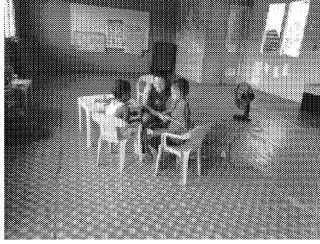


写真4 託児所の内装

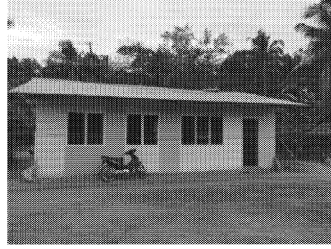


写真5 完成した託児所

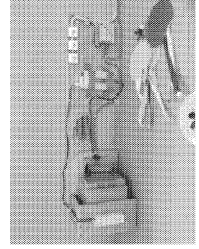


写真6 ソーラー電機

1) だ。村に流れる川を手漕ぎで外洋まで上り、そこで、糸を垂らして魚を釣るのである。糸釣で得られる魚は小振りのものばかりで、バケツ 1 杯でおよそ 300 円から 500 円程度である。悪天候の時は漁に出られず、収入はゼロとなる。プノン村の生活は厳しく貧困である。ココ椰子、バナナ、パパイヤなどの食物があり、一程度の食料は確保できるものの、一度、病人が出る、あるいは、台風などで家や船を損失するなどの被害に遭うと、自力で立て直すのは困難で外部援助が必要となる。その援助をしてきたのが GK レイテである。

ISR メンバーがリピーターとなって何度も村を訪れる事で、親密性が高まってきた。すると、これまで見ていなかった実情が明らかになってきた。各世帯が複雑な家庭事情を有していること、また、村民の生活向上意欲が希薄である事がわかってきたのだ。プノン村が貧困なのは、自力では解決できない問題が根深く存在するのは事実であるが、生活改善のための村民の努力も見られなかった。例えば、前夜飲みすぎて好天気でも漁に出ない、また、収穫量を増やすための工夫をしないなどである。村民との親密性の高まりは、ISR メンバーに村で生活する上の知恵や遊びなどを伝えた。それまでの、支援する側と支援される側の上下関係は、友達、あるいは、家族という水平な関係へと変化していった。プノン村で英語を話せるのは 10 代の一部の若者のみで、大人はほとんど話せない。それでも女性たちは ISR に食べ物の差し入れをし、扇風機やブランケットなど、託児所での寝泊まりに不自由がないように気を使ってくれる。日々一緒に生活する事で日常的な意思の疎通は言葉が不足しても分かり合えるようになっていく。ISR と関わりの深い世帯は、GK レイテの住宅に住む 14 世帯であるが、その少ない世帯数の中でも、病気の親の面倒をみながら都市部や海外で働く兄弟の子供たちと一緒に生活している世帯、親が行方知れずになったままの世帯、育児放棄する母親がいる世帯、障害を持った子供を抱えている世帯など、どの家庭も貧困で苦悩を抱えている。それでも彼らは逞しく生きているわけだが、日頃からよくお酒を飲み、好天気でも漁に出かけない彼らは、ISR の目には怠け者として映ってしまう。また、病人の薬や通院費など、お金を頼む人がいると、同情しつつも、救えきれない自分たちの活動意義に疑問を抱くようになっていった。プノン村の生活が元に戻り、村民との親密性が深まった 2015 年から 2016 年は、託児所をただ建設しただけでは村の根本的な問題である「貧困」は解決されないことを思い知らされた時期であった。

## 5. 支援からソーシャル・ビジネスへ (2017 年-2018 年)

大学4年の生活は長いようで短い。特に、被災地の支援活動を行っていると、ようやく現地の状況を理解し、活動に本腰が入る頃には学生達は卒業してしまう。そして、新しく入ってきたメンバーの新たな学びと体験と知識を積むサイクルが始まる。2017年で、ISRのチャリティー・イベントの体験者は一人もいなくなった。それに伴い、メンバーの意識が大きく変わり、プノン村における活動内容も変化していった。村には、水の安定供給問題と託児所の先生の雇用問題があるわけだが、これらを解決するには、毎月かなりの収入を捻出していかなければならない。ISRがスポンサーになることは不可能であることは明らかだった。そこで考え出されたのは、村でソーシャル・ビジネスを立ち上げて毎月安定した収入を生むことだった。

最初に考え出されたのは、レイテ島でとれるバナナ科の植物繊維であるアバカ（マニラ麻）の機織りだった。村から近くにあるアバカの手織りを生産販売している会社が、村人を教育してくれるというオファーがあったのだ。しかし、お腹が空けば、木に生っている果物を食べ、お金が必要になったら漁に出る気ままな暮らしを続ける彼らは、技術の修得に時間がかかる機織り業の希望者はいなかった。次に考えたビジネスは、バージンココナッツオイル（VCO）の生産販売である。村にもココナッツが生い茂っており、生産プロセスもシンプルで技術を修得するための忍耐もいらない。ISRは、日本でもVCOは人気が高いことから、村で生産したVCOを日本で販売する方法を探ることにした。このようにISRは、ソーシャル・ビジネスでプノン村の収益を稼ぐことを考えついたが、ビジネスを全く知らないサークルである。フィリピンから日本へVCOを輸出する方法、規制、税金、送料から、VCOの在庫場所、販売方法、不良品対策など調べなくてはならないことが山積みであった。初めはソーシャル・ビジネスのコンセプトに賛同していたISRメンバーも、次第に、サークルとしての目的を見失い、ビジネスに関心がある者、ボランティア活動に関心がある者、サクラモヒラとの共同に関心を示す者、そして、活動自体に関心を失う者が徐々に表面化していった。ISR存続の危機に陥っていったのである。

## 6. 現在のISRと協力者達（2019年—）

2019年2月現在、ISRは日本で自然化粧品会社アーダーブレン社をパートナーとして得て、障害者が働く作業所でVCO石鹼を生産し、販売を始めた。メンバーの一人は、レイテ島に長期滞在をして、VCO製作所の立ち上げと輸出の実現を計画している。一方で、バングラデシュへ行き、サクラモヒラと活動する学生もいれば、白山キャンパス周辺の店とコラボしてISRの活動写真展と製品販売を実現したメンバーもいる。いずれの活動も小規模だが、各メンバーが自分の関心事や得意分野を生かしている。各自主体的に行動して得た情報や考えを毎週行われる会議で共有し議論をした上で、決定事項の計画を立てている。メンバー一人ひとりが独立したリーダーとして機能している。2019年1月から新しい代表が選出された。候補は二人いた。二人とも二部生の男子である。一人は、決めた事を形にしたいと意欲満々な行動派で、もう一人は、おっとりとした人の話をよく聞く学生だ。メンバーが代表に選んだのは、後者の学生だった。

ISRが存続の危機から活発な活動へと転換した主な要因として、大きく3つ考えられる。第1

に、合宿を行い ISR のミッションとタスクを再考したことである。先輩たちが命名した Individual Social Responsibility (ISR)-ConnAction の意味は、「行動を起こす事で人々をつなげ、より良い社会の形成を実践していくこと」を基本的姿勢とし、活動の理念を「支援の規模やスタイルにこだわらず、困っている人を助けたいと思う個人をつなぎ社会的責任を果たしていく」であった。新代表は、合宿前に ISR のミッションとタスクを考えてくる事を宿題とした。合宿で各メンバーが最も多く使ったキーワードは、「やさしい社会」「人をつなげる」「共有」「挑戦」であり、先輩たちの理念と自分たちが目指すものが同じだった事に、現役メンバーは驚き、ISR の活動目的を再確認した。第2に、社会人となった先輩たちの存在である。年に複数回、ISR の「大家族集会」があるが、そこには先輩達が集まってくる。先輩達と現役メンバーの交流は、双方にとって前向きな刺激となっている。第3は、ISR のネットワークである。ISR を受け入れ、学びの場を提供しているプノン村と GK レイテの存在である。経済的、社会的、環境的に ISR のどのメンバーよりも厳しい生活を送りながら、「マイペース」とも思われる彼らの生き方は、絶えず ISR に考える要素を与えてくれる。また、日本においては、VCO 石鹼共同生産者のアーダーブレン社とバングラデシュに活動拠点を持つサクラモヒラからは、モノを生産販売するためのノウハウと考え方など実践的な事を学んでいる。学外にも社会ネットワークを持っていることが ISR の強みと言える。

## 7. 考察

ISR の活動内容は、被災地域における託児所建設→物質的支援→ソーシャル・ビジネス起業と、これまで大きく変化してきた。また、村民との関係も、支援する側と支援を受ける側といった上下関係から、親密な友達・家族といった水平的関係へと変化した。親密な関係は、メンバーへ個人的な金銭援助の要求につながり、その経験をもとに、ISR は、資金や物資を与える援助から、村民と GK レイテと村の資源を活用したソーシャル・ビジネスの起業に向けて話し合い、協働活動へとシフトさせていった。既述したように、ISR は能力がある者を選んでいるわけではない。誰でもメンバーになれる。それでも ISR から国を代表する海外研修プログラムの研修生として選ばれていることは、現地活動を通して発見した問題や疑問を解決するための方策を考え悩み続けるからではないだろうか。解決法を見出せずにいることは苦しい。会議でも発展的な話し合いにならず、具体的な活動に繋がらない時期が続くと退会する学生もいた。それでも、ISR が危機を乗り越えて存続しているのは、結果を求めるのではなく、ISR が自ら行動を起こし学んでいくプロセスを見守り応援する環境があるからだと考える。行動を起こすミッションがあるからこそ、ISR はグローバルに活躍するために必要な総合能力を時間をかけながらも学内の授業と実践の場身につけていっている。

### 【参考文献】

東洋大学ウェブサイト：ISR-ConnAction チャリティー・イベント情報 <https://www.toyo.ac.jp/site/rds-global/37778>.

小早川 裕子「学生団体の被災地支援活動からの学び：レイテ島漁村の自立支援を目指して」、東洋大学国際地域学部『国際地域学研究』第19号、2016年、pp24-35

小早川 裕子『「豊かで貧しい国」の「貧しいが幸せな国」からの学びと実践』、東洋大学地域活性化研究所『研究所だより』No. 51, 2016, pp10-12